

漢書》郡国志一劉昭注に、「是以山海經称、禹乃使大章、步自東極、至于西垂、二億三万三千三百里七十一歩。又使堅亥、步自南極、至于北垂、二億三万三千五百里七十五歩。四海之内、則東西二万八千里、南北二万六千里、出水之山者八千里……」とある。劉昭注引『山海經』は佚文であるが、本文に引用した有始覽、地形訓は、『山海經』に基づくものである。また、地形訓には、別に九州・八岳・八紘・八極と拡大する世界が記されている。

(23) 「靈憲」の輯本はいくつかあるが、比較的完備したものとしては、嚴可均『全後漢文』卷五五を参照。また安居香山氏は、宇宙生成論にかかわって、『靈憲』と緯書との親しい関係を論じている(前掲注(12)著書第五章「緯書における生成論」)五「『靈憲』の生成論と緯書思想との関係」。

(24) 緯書の出現およびその思想的淵源については、杉本忠氏「讖緯説の起源及び発達(一)、(二)」(『史学』第一三巻第二号、第四号、一九三四年)、ならびに前掲注(12)安居著書参照。

(25) 赤県神州(中国)が大九州の東南に在るとするのは、正確に言えば、王充『論衡』の鄒衍大九州説理解からであり、『史記』卷七四孟子荀卿列伝には見えない。東南説は、緯書説をうけた王充に独自の解釈である可能性が高い。この点については前掲注(12)安居著書第六章参照。

(26) 前掲注(12)安居・中村著書、および安居香山『緯書の成立とその展開』(国書刊行会、一九七九年)参照。

(27) 吉村武彦氏は、日本律令国家の「治天下」レジームの特質にかかわって、中国とは別の「天下」を構想することを可能にしたのは須弥山を中心とする仏教の世界観であると指摘した(「倭國と大和政權」岩波講座『日本通史』第二巻古代一所収、岩波書店、一九九三年)。この指摘について異論はないし、日本の天下觀の構想の獨自性を考えるうえで重要な指摘であると思う。ただ、中国の天下觀念は、吉村氏の考えておられるような世界觀ではなく、また天下を越える中国の世界觀の中にも中国中心の世界觀を相対化するものが、その形成時期においてすでに存在していることを知つておく必要があると思う。

(28) 戸籍を基礎として社会編成を実現する古代中国の実効的支配のあり方については、拙著『中国古代国家の思想構造』(校倉書房、一九九四年)

(29) 第一部「中国古代国家の社会編成論」参照。
章「孝經」の国家論」参照。

(一九九九年九月一日受理)
(28) 拙著第五
(わたなべ しんいちろう 文学部教授)

いることが分かる。

(11) 王制篇と『周礼』とを代表的古典として、今学と古学との対比を試みた著述に、清末の廖平『今古学攷』(光緒二年序、一九二八年、北京資研社六訳館叢書本)がある。

(12) 『史記』卷七四孟子荀卿列伝に、「其次鄒衍、後孟子。……以為、儒者所謂中國者、於天下乃八十一分居其一分耳。中國名曰赤縣神州。赤縣神州內自有九州、禹之序九州是也。不得為州數。中國外如赤縣神州者九、乃所謂九州也。於是又有裨海環之、人民禽獸莫能相通者、如一区中者、乃為一州。如此者九、乃有大瀛海環其外。天地之際焉」とある。鄒衍の大九州説については、安居香山・中村璋八『緯書の基礎的研究』(国書刊行会、一九六六年)第八章「緯書における地理的世界観」(安居氏執筆)参照。

(13) 四海については、なお閻若璩『四書叢地又統』「四海」条を参照。

(14) 『礼記』王制篇「凡九州千七百七十三国」の本文と鄭玄注にかかわって、正義は、「弼成五服」についての臯陶謨鄭玄注を三条引用している。本文に引用した鄭玄注とあわせて、ほぼ完全な注釈が復元されている(たとえば安井息軒『書説摘要』卷一臯陶謨)。文章が長くなるので、ここでは割愛する。

(15) なお経古文学の賈逵・馬融は、鄭玄の五服方万里説に対し、五服方六千里説を主張していた。『尚書』禹貢篇五服説末尾の正義に、「賈逵・馬融以為、甸服之外百里至五百里、特有此数、去王城千里。其侯綏要荒服、各五百里、是面三千里、相距為方六千里。鄭玄以為、五服、服別五百里。是堯之旧制。及禹弼之、每服之間、更增五百里、面別至于五千里、相距為方万里」とある。経古文学にも分歧のあったことが分かる。また、禹貢五服と『周禮』九服の内容、及び天下方五千里と天下方万里については、顧頡剛「畿服」(『史林雜識』中華書局、一九六三年)に詳しい検討がある。

(16) 平勢隆郎氏は、前四世紀に入った頃に天蓋を見上げる視点が、極上からその視点に変わったところから、天下の語が生まれたとする(『中国古代紀年の研究』汲古書院、一九九六年)。一四三頁～一四四頁および二四頁。

(17) 始皇帝の巡行については、稻葉一郎氏「秦始皇の巡狩と刻石」(『書説』第二五号、一九八九年)参照。また鶴間和幸氏は、三段階の地域を基盤とする中国古代国家発展の第三段階として、統一國家・華夷共存の世界を区別し、この段階における天下・帝国概念の歴史的意味を、始皇帝の

巡行・刻石をも論点に加え、独自の観点から検討している(「中華の形成と東方世界」四「都市国家から中華へ——三つの地域の拡大——」岩波講座『世界歴史』3、一九九八年)。

(18) 秦の天下統一から武帝期にいたる天下観念の成熟については、なお内事と外事、戦国的封建制の観点から、平勢隆郎氏が同様の見通しを述べている(前掲注(16)著書二三三頁～二三八頁)。

(19) ここに見える文書は、いわゆる行政文書だけを指すものではない。『史記』卷五三蕭相国世家に、「沛公至咸陽、……何独先入收秦丞相・御史律令・図書藏之。……漢王所以具知天下阨塞、戸口多少、強弱之處、民所疾苦者、以何具得秦図書也」とあり、王充の脳裏にある文書の内容が分かる。律令は言うまでもなく法律であるが、図書には天下の地図・戸籍など、支配の基礎となる文書が含まれていることは明らかである。

(20) 漢以後の歴代統一王朝の疆域を列举すれば、つぎのとおり。隋の領域は「東西九千三百里、南北万四千八百十五里、東南皆至於海、西至且末、北至五原、隋氏之盛、極於此也」(『隋書』卷一九地理志上)、唐の領域は「其地、東極海、西至焉耆、南尽林州南境、北接薛延陀界、東西九千五百一一里、南北一万六千九百一十八里」(『唐書』卷三七地理志一)、宋の領域は「東南際海、西尽巴僰、北極三閔、東西六千四百八十五里、南北万一千六百三十里」(『宋史』卷八五地理志一)、明の領域は、「計明初封略、東起朝鮮、西據吐番、南包安南、北距大磧、東西一万一千七百五十里、南北一万零九百四里」(『明史』卷四〇地理志一)である。『元史』卷五八地理志が元の領域を「里数を以て限り難し」と述べるほかは、長短補正してほぼ方万里のうちに概括可能である。

(21) 儒教の成立については、さしあたり板野長八氏『儒教成立史の研究』(岩波書店、一九九五年)第二章「儒教の成立」(初出一九七〇年)参照。

(22) 同様の記述は、たとえば『山海經』中山經に、「天地之東西二万八千里、南北二万六千里、出水之山者八千里、受水者八千里」とあり、『続代紀年の研究』汲古書院、一九九六年)。一四三頁～一四四頁および二四頁。

その時期は、ともに前漢末から後漢初にかけての時期であり、天下観

論評している。

念の完成と前後するものである。否、むしろ天下観念のみならず、天下を越えてその外部に広がる世界観も、同じ時期に形成されたものと限定された領域をもつものであり、天下観念の成立は、それを越えて考えるのが正当であろう。天下は、経今文学と経古文学とを問わず、広がる世界の存在を観念的に要請するからである。中国中心の中華的世界観の形成とともに、それを相対化する昆崙山中心の世界観の形成まで含めて見る時、中国における古典的国家観、古典的世界観の形成は、前漢末から後漢初にかけての時期に指定するのが妥当ではあるまいか。

注

- (1) このような問題意識は、日本古代史家の吉田孝氏の問題提起に負ってい。吉田氏は、「歴史のなかでその後の国制や文化の基礎となり、のちの時代から何らかの規範意識をもって回顧される国制や文化を『古典的』と定義」し、五つの指標にもとづいて、ヤマトの古典的な国制・文化の枠組みが平安時代前期に成立したことを主張した(『日本の誕生』第八章「ヤマトの古典的国制の成立」岩波書店、一九九七年)。日本の誕生にかかる吉田氏の提起は、国制・文化全般にわたるものであるが、小論ではその中核をなすと思われる古典的な国家観念についてのみ問題にする。吉田氏の問題提起の全体的な評価は、中国における古典的な国制・文化の解説が進んでのち、比較史的な検討をへて可能になるであろう。

- (2) 劉師培『中國民約精義』三巻(一九〇三年)は、ルソー『民約論』に啓発されて、その思想的根源が中国の伝統思想のなかにも存在しつづけたことを論じたものである。そのなかで劉氏は、たくましくて『明夷待訪録』をはじめ、天下を参照点とする伝統中国の政治的諸言説を紹介し、

(3) 以下、戦国時代の時期区分については、しばらく藤田勝久氏の提案に従う。すなわち、前期は、秦の咸陽遷都・商鞅の改革にいたる、前四五三年～前三五〇年。中期は、合縱連横から齊の臨淄の陥落にいたる、前三五〇年～前二八四年。後期は、秦の東方進出から統一にいたる、前二八四年～前二二一年である(佐藤武敏・工藤元男・早苗良雄・藤田勝久『馬王堆帛書 戰國縱橫家書』『戰國略年表』朋友書店、一九九三年)。

(4) 『礼記』王制篇正義に、「……故鄭(玄)答臨碩云、孟子當叔王之際、王制之作、復在其後。盧植云、漢孝文皇帝令博士・諸生、作此王制之書」と、王制篇の制作について、後漢の鄭玄・盧植の考え方を提示している。鄭玄は孟子以後、盧植は漢の文帝期の作とする。

(5) 『孟子』著述の同時代性については、吉本道雅氏「孟子小考——戦国中期の國家と社会」(立命館文学)第五五一号、一九九七年)参照。

(6) 『禹貢』の著作年代については、拙著『天空の玉座』(柏書房、一九九六年)第三章「帝國の構造」二二三～二一八頁参照。

(7) 『荀子』正論篇第一八に、「……故諸夏之國、同服同儀。蛮夷戎狄之國、同服不同制。封内甸服、封外侯服、侯衛賓服、蛮夷要服、戎狄荒服。甸服者祭、侯服者祀、賓服者享、要服者貢、荒服者終王……」とある。

(8) 『後漢書』章帝紀第三建初四年一一月壬戌条に、「於是下太常・將・大夫・博士議郎・郎官、及諸生・諸儒、會白虎觀、講義五經同異。使五官郎將魏應承制問、侍中淳于恭奏。帝親稱制臨決、如孝宣甘露石渠故事、作白虎議奏」とある。

(9) 『尚書』経今文学の天下観念は、西晋の張華『博物志』にも、「中国之域、左滨海、右通流沙。方而言之、萬(当作方)五千里、面二千五百里。東至蓬萊山、西至隴右。後跨荆(当作朔)北、前及衡岳(『太平御覽』卷三六引『博物志』)」と、具体的な四至をともなって継承されている。

(10) 王莽が『周禮』によって政治をおこなったというのは、俗説であり、多分に宋学による歪曲を経たものである。漢末から新王朝にかけての王莽の政策基調をなした経書を具体的に分析してみれば、後漢に入つて明確になる経今文学、経古文学双方のテキストおよびその解釈に基づいて

敬う者は、敢て人を慢らず。愛敬親に事うるに尽き、而して徳教百姓に加わり、四海に刑す（愛親者、不敢惡於人。敬親者、不敢慢於人。愛敬尽於事親、而徳教加於百姓、刑于四海）と述べる。御注は、これを「徳教、天下に加被すれば、當に四夷の法則する所と為るべし（則徳教加被天下、當為四夷之所法則）」と解釈し、邢昺の疏は、「こ

のようにすれば、至徳・要道の教えが天下に広がり、また四海の蛮夷も徳化を慕つて見倣うようになるはずだ（如此、則至徳要道之教、加被天下、亦当使四海蛮夷、慕化而法則之」と、敷衍している。徳治は、天下の百姓支配のみならず、四海の夷狄にも及ぶのである。²⁹

百姓支配についてはすでに述べた。夷狄に対する支配はどうであろうか。夷狄に対する支配の達成は、現実に郡県制のなかに編入され、実効的に支配されない限りは、天子（皇帝）の徳の拡大によるほかない。『禹貢』は、このことをいみじくも「声教」の及ぶ限りと道破している。徳による支配は、無限ではないが、限り無く拡大する可能性をもつ。皇帝（天子）の天下支配は、戸籍をつうじた限定的な実効的支配を根幹としつつも、徳の支配の無限の拡大可能性を否定しない。

天下観念が單一政治社会的相貌と複合政治社会的相貌との相互転化の過程にありながら、單一政治社会的相貌をその決定的局面とするのは、以上のような実効的支配を基礎にする皇帝支配の特質に基づくものであらう。

天下型国家は、天子の徳治の対象となる夷狄（四海）の存在を条件とする。このような四海を積極的に領域にとりこんで觀念されたのが『周礼』の天下觀念である。『周礼』の天下は、天下觀念の一面を代表するにすぎないが、経今文学系の天下觀念とともに、伝統中国の古典的な国家觀を完成させたものとして画期的な意義がある。その意味で『周礼』が判然と姿を現した前漢末の時期は、中国における古典的な国家觀念の成立期として重要な意味をもつてくる。このことは、天下を越える世界觀の形成を視野に入れる時、いよいよ重要性を増していく。

すでに述べたように、天下は無限に広がる世界ではなく、限られた領域であった。その外部には四荒、四極と呼ばれる広大な領域が構想されていた。しかも、この世界的領域の中における天下領域の位置づけには二つの構想が存在した。一つは経古文学系の世界觀であり、天子の統治する王城を世界の中心として、九州→四海（天下）→四荒→四極と重層的に展開するものである。いま一つは、昆崙山を世界の中心とし、その東南に方五千里の天下を構想する経今文学系の世界觀である。前者は経古文学の出現と軌を一にして登場した『爾雅』を典型的条件によって左右される。徳によるイデオロギー支配は、実効的支

基盤を構成していったのではないかと考えられるのである。²⁷

おわりに——中国における古典的世界観の形成

小論の目的は、天下をめぐる領域観念を考察することにより、古代中国における独自の国家観念の特質を明らかにしようとするものであった。以下に、小論で獲得されたいくつかの論点をふりかえりながら、天下型国家とその外部に構想された世界観の特質について指摘し、ひとまず筆を擱くことにしたい。

中国古代の経学上の天下観念を系統的に観察してみると、そこには、①方三千里の領域をもつ九州＝中国を天下とする『礼記』王制篇、②方五千里の九州＝中国を天下とする『尚書』經今文学、③方万里の九州と四海（中国と夷狄）からなる天下を構想する『周礼』・『尚書』経古文学の三つの基本的認識が存在した。それらは、戦国秦漢期にかけて拡大してきた古代中国の政治社会の実態を反映して構想されたものであり、以後の伝統中国においてたえず参照されるべきスタンダードを構成した。

天下に関する三つの基本認識は、天下を同一言語圏・同一交通圏・同一文化圏からなる九州＝中国の单一政治社会ととらえる経今文学系の天下観念と、中国と夷狄とを含む複合的政治社会（帝国）ととらえる経古文学系の天下観念とに二分することができる。天下は、このような单一政治社会的側面と複合政治社会（帝国）的側面とをもって、伝統中国に受け入れられてきたのである。しかし、専制国家の郡県制

に基づく編戸－百姓に対する実効的支配の実態からこの天下観念を照射してみるとならば、二つの側面はたえず相互転化しつつも、单一政治社会へ回帰してゆくのである。单一政治社会的相貌と複合政治社会的相貌とは、天下観念の二側面ではあるが、その決定的側面は单一政治社会的相貌にある、と言えよう。この点については、前稿において唐代の事例に基づいて検証したとおりである。このような天下観念と実効的支配との総合的な政治社会の在り方を天下型国家と規定しておきたい。

問題は、なぜ单一政治社会的相貌と複合政治社会的相貌とがたえず相互転化しつつも、单一政治社会へ回帰してゆくのかである。それは、伝統中国の皇帝支配がもつ実効的支配とイデオロギー支配の二つの支配の相互関係に基づくものである。

伝統中国の皇帝支配は、戸籍をつうじて実効的に達成された。それは、具体的な人間について、その姓名と居住地とを家族・世帯単位に戸籍上に特定して百姓とし、こうして特定した人格（百姓）を郡県の行政機構と経済的收取機構とをつうじて隸属させることにより達成された。戸籍をつうじて達成される皇帝の国家支配は、被支配者がどこの誰であるかを特定してはじめて成り立つものであり、それ自体限定的なものである。²⁸ それ故、皇帝（天子）が達成する統治領域である天下も本来限定された領域、すなわち郡県制の及ぶ範囲に限定される。伝統中国の皇帝支配がもつもう一つの側面は、徳治による支配、すなわちイデオロギーによる被支配者の能動的な意志の領有である。たとえば『孝經』天子章は、「親を愛する者は、敢て人を悪まず。親を

帝・平帝期に盛んに著述されたといわれる緯書の所説をふまえたものである。²⁴ その緯書の一つ『河図括地象』につぎのようにある。

八極の広さは、東西二億三万三千里、南北二億三万一千五百里なり。夏禹の治めし所の四海の内の地は、東西二万八千里、南北二万六千里なり。天に九道有り、地に九州有り（八極之広、東西二億三万三千里、南北二億三万一千五百里。夏禹所治四海内外地、東西二万八千里、南北二万六千里。天有九道、地有九州。『玉海』卷一四地理引『河図括地象』）

ここに見える八極の領域は、『靈憲』に全く同じである。また、『礼記』

曲礼篇下の「天子祭天地、祭四方、祭五祀、歲徧」の孔穎達正義は、『地統書括地象』を引いて、つぎのような解説をおこなっている。

案ずるに、地統書括地象に云えらく、地の中央を崑崙と曰う、と。又た云えらく、其の東南の方五千里を神州と曰う、と。此を以て之を言えば、崑崙は西北に在り、別に四方・九州を統ぶ。其の神州は、是れ崑崙の東南の一州のみ。一州中に於て、更に分かちて九州と為せば、則ち禹貢の九州是れなり（案地統書括地象云、地中央曰崑崙。又云、其東南方五千里曰神州。以此言之、崑崙在西北、別統四方九州。其神州者、是崑崙東南一州耳。於一州中、更分為九州、則禹貢九州是也）

崑崙山が世界の中心にあって四方・大九州を統括し、その東南に位置する方五千里の神州は、『禹貢』の九州だと言うのである。

『玉海』引『河図括地象』とこの『地統書括地象』との関係は明らかではない。しかし、関連する著述であることは疑いない。世界はハ

極の領域からなり、この世界の中心である崑崙山の東南に赤県神州（中国）が存在すると考える『靈憲』の記述は、明らかに『河図括地象』と『地統書括地象』とに関連するからである。

赤県神州（中国）が大九州の東南に位置する全世界の八一分の一の領域だとする考えは、すでに述べたように鄒衍に由来する。²⁵ しかし、世界が八極の領域をもつこと、崑崙山がその世界の中心に位置すること、およびその東南に在る赤県神州（中国）が方五千里の領域をもつことは、『靈憲』および『河図括地象』・『地統書括地象』に固有の観念である。

赤県神州（禹貢の九州）が方五千里の領域であるとするのは、すでに見たように禹貢經今文学の解釈に基づくものである。『河図括地象』をはじめとする緯書は、すでに明らかにされているように、經今文学との緊密な関係をもつて著述されたものであり、ここにもその証左を見出すことができる。²⁶

『周禮』を中心とする経古文学系の儒家が中国を中心として九州・四海からなる方万里の天下の外部に、さらに四荒・四極と重層的に拡大する世界の領域を構想した時、經今文学と密接に関連する思想家の中には、張衡などのように、崑崙山を世界の中心とし、その東南に九州（中国）を位置づける世界の領域を構想する人びとが出てきたのである。この考え方は、経古文学系の中華思想的世界觀のように、その後の中国における世界觀の主流にはならなかつたけれども、緯書の受容とともにかなりの程度受容されたはずである。それは、この時期に前後して東伝した仏教の須弥山を中心とする世界觀を受容する觀念的

れている。八荒と四極とのちがいはあれ、九州・四海の外部にもうひとまわり大きい世界が構想されていることは同じである。

『爾雅』釈地第九では、より整理が進んでいる。釈地は、九州の地を解説したあと、四極（東＝泰遠、西＝邠國、南＝濮鉛、北＝祝粟）に言及し、さらに四荒（東＝日下、西＝西王母、南＝北戸、北＝觚竹）、四海（東＝九夷、西＝七戎、南＝六蛮、北＝八狄）へと展開する。総じて『爾雅』釈地は、九州→四海→四荒→四極と広がる世界を記述しているのである。

すでに述べたように、鄭玄は、『爾雅』釈地の四海にもとづいて、天下を九州＝中国と四海とからなる複合領域（帝国）であると解釈した。したがって、鄭玄の観念にあつては、天下を越える領域として、なお四荒および四極の領域が構想されていたはずである。

九州→四海→（四荒→）四極と広がる重層的な世界觀は、王城を中心として漸進的に拡大してゆく世界であり、中国中心の世界觀である。いわゆる中華思想の根源をなす世界觀は、以上のように、戦国期の非儒家文献上に出現した四海＝天下を越える領域觀念（四極・四荒等）が、漢代にいたって、儒家の、とりわけ経古文学の天下觀念と接合されてできあがったものである。

（二）経今文学に由来する世界觀念

天下を越える世界に関する伝統中国の領域觀念には、いま一つ重要な言説がある。それは、経古文学の天下觀念があくまでも中国を中心として構想される世界觀であったのに対し、それを相対化する世界觀

である。

後漢前期の人、張衡は、独自の世界觀・宇宙觀を記した『靈憲』一篇をものした。『靈憲』の完本は現存しないが、『後漢書』をはじめ、いくつかの佚文が残っている。^{*23} そのなかで彼は、世界の広さについてつぎのように述べている。

八極の維、径は二億三万二千三百里、南北は則ち千里を短減し、東西は則ち千里を増廣す。地自り天に至るまで、八極に半ばすれば、則ち地の深さも亦之の如し（八極之維、徑二億三万二千三百里、南北則短減千里、東西則増廣千里。自地至天、半於八極、則地之深亦如之。『続漢書』天文志上劉昭注引『靈憲』）

この方二三万二千三百里の領域をもつ八極は、『淮南子』地形訓に見える四極の領域方二三万三千五百里七十五歩とほぼ同じである。異なるのは、中国（天下）の位置である。『靈憲』は、赤県神州（中国）についてつぎのように述べている。

昆崙の東南に赤県の州有り。風雨時有り、寒暑節有り。苟くも此の土に非ざれば、南は則ち暑多く、北は則ち寒多く、東は則ち風多く、西は則ち陰多し。故に聖王焉に處らず（昆崙東南有赤県之州。風雨有時、寒暑有節。苟非此土、南則多暑、北則多寒、東則多風、西則多陰。故聖王不處焉。『藝文類聚』卷六州部引張衡『靈憲図』）

聖王が統治する赤県神州（中国）は、昆崙山の東南にあり、世界の中で氣候の調和する唯一の領域であると言うのである。

崑崙山の東南に赤県神州（中国）があるとする觀念は、前漢末の哀

を構成し、漢代以後の士大夫知識人がそれぞれの時代の王朝国家を理解するための参照点とするようになつたのである。

三 天下の外部世界——二つの世界観念の形成

天下が実効的支配に基づく限られた政治社会であり、伝統中国に独自の国家の表現だとするならば、その外部に存在する世界はどのようにとらえられていたのであらうか。本章では、天下の外部に構想された二つの世界を考察することにより、古代中国における世界観念の特質を明らかにしてみたい。

(一) 経古文学の世界観念

方三千里の天下を構想した『呂氏春秋』には、別に有始覧と呼ばれる篇がある。そこにつぎのような興味深い記述がある。

凡そ四海之内、東西二万八千里、南北二万六千里にして、水道八千里、水を受ける者も亦八千里なり。通谷は六、名川は六百、陸注は三千、小水は万もて数う。凡そ四極之内、東西五億有九万七千里、南北も亦五億有九万七千里なり（凡四海之内、東西二万八千里、南北二万六千里、水道八千里、受水者亦八千里。通谷六、名川六百、陸注三千、小水万数。凡四極之内、東西五億有九万七千里、南北亦五億有九万七千里）

これによれば、ほぼ方二万八千里の領域をもつ四海の外にはさらに四極の地が広がり、それは方五九万七千里の領域をもつものであつた。

同様の記述が『淮南子』地形訓にある。

四海之内を闊べて、東西は二万八千里、南北は二万六千里、水道は八千里、通谷は其（六）、名川は六百、陸径は三千里なり。禹乃ち太章をして、東極自り歩かしめ、西極に至らしむるに、二億三万三千五百里七十五步なり。堅亥をして、北極自り歩かしめ、南極に至らしむるに、二億三万三千五百里七十五步なり（闊四海之内、東西二万八千里、南北二万六千里、水道八千里、通谷其（六）、名川六百、陸径三千里。禹乃使太章、歩自東極、至于西極、二億三万三千五百里七十五步。使堅亥、歩自北極、至于南極、二億三万三千五百里七十五步）

ここにも、四海とその外に広がる四極の地が構想されている。四海の広さは、有始覧・地形訓ともに、東西二万八千里、南北二万六千里であるが、四極の領域は、地形訓の場合、方二三万三千五百里七十五步であり、距離にして二分の一、面積にして四分の一となつていて。領域の広さにちがいはあるが、四海とその外に四極の地が広がると考へるのは同じである。戦国期の非儒家文献を中心に四海・四極・四荒など、天下の領域をこえる諸領域が構想されるようになつたことが分かるであろう。²²

漢代に入ると、儒家系文献のなかで、これら天下を越える諸領域の再編成が試みられる。たとえば『説苑』辨物篇は、「八荒の内に四海有り、四海の内に九州有り、天子は中州に處りて、八方を制するのみ（八荒之内有四海、四海之内有九州、天子處中州、而制八方耳）」と述べている。ここには、中州→九州→四海→八荒と広がる世界が構想さ

漢王朝の支配領域は方万里を越え、周辺の要服・荒服の地にいたるまで、中国の服装（文化）を受容しているというのである。このことを、王充はさらに詳しく、つぎのように展開している。

今上（章帝）命に即き、成るを奉じ満を持し、四海は混一し、天下は定寧たり。……周の時僅かに五千里の内を治むるのみ。漢氏は土を廓げ、荒服の外を收（牧）む。……古えの戎狄、今は中国と為り、古えの鶮人、今は朝服を被り、古えの露首、今は章甫を冠り、古えの跣足、今は商鳥を履く。盤石を以て沃田と為し、桀暴を以て良民と為し、堦垣を夷げて平均と為し、賓わざるを以て斎民と為す。太平に非ずして何ぞや（今上即命、奉成持満、四海混一、天下定寧。……周時僅治五千里内。漢氏廓土、收荒服外。……戎狄、今為中國、古之鶮人、今被朝服、古之露首、今冠章甫、古之跣足、今履商鳥。以盤石為沃田、以桀暴為良民、夷堦垣為平均、以不賓為斎民。非太平而何。『論衡』宣漢篇第五七）

方万里をも越える漢王朝の天下九州は、禹貢五服の要服・荒服の地を含み、もともと夷狄を含んではいる。しかし彼ら夷狄は、すでに中國の文化（衣冠）を受容し、「中國」となっているのである。王充の天下九州は、方万里をも越える現実的領域を、文書と文化の同一性とによって統一的に支配する国家である。それは、すでに見た「凡そ冠帶の国、舟車の通ずる所、象訛狄鞮を用いざる」方三千里の天下（呂氏春秋 慎勢篇）の拡大再版である。

『周礼』『尚書』経古文学などのように、天下を九州と四海とに区別し、四海を夷狄の住む領域として固定化するならば、天下はいわゆる帝国的相貌をもつものとして現れる。しかしそれらは、天下型国家の一面にすぎない。天下は、とりわけ秦漢統一国家以来、王朝によつて戸籍・文書・郡県制によつて実効的に支配される限定された領域であり、王朝拡大期には夷狄を包摂することがある。しかし夷狄を含む領域は、王充が述べるように、やがて中国化され、天下＝四海＝九州＝中国となる。斎民（百姓）にたいする実効的支配の貫徹の中で、差別化と同一化をくりかえしながら、観念的には方三千里、方五千里、方万里の相貌をもつて表現されるのが天下型国家なのである。

天下を無限にひろがりゆく世界ととらえるならば、それは全くの誤りである。少なくとも古代中国人びとは、そのようには考へなかつた。それは、実体的には、一定の限られた領域を統治する国家であり、郡県制に基づく百姓（斎民）の実効的支配の貫徹の中で、いわゆる帝国的相貌と国民国家的相貌との二つの顔をもつて相互転化する政治社会である。このような国家をここでは天下型国家と呼んで区別しておきたい。

ともあれ、戦国期以来の実効的支配の拡大は、秦漢統一王朝の成立とともに、ほぼ方万里で限界をむかえた。²⁰ 観念の世界でも、前漢末後漢初の儒教の成立によって、天下観念の拡大は方万里で停止した。²¹ 方三千里、方五千里、方万里の天下は、それらを記す經典とその解釈とともに觀念素材として固定化され、天下に関する三つのスタンダード

る。天下＝方万里の観念が出現するのは、秦の天下統一以後のことではなければならない。

問題になるのは、天下＝方万里を唱える『周礼（周官）』である。『周礼』は、時代を異にして成立した様ざまな観念素材を混在させており、その著作年代の決定は、かなり難しい。ただ、天下＝方万里の領域観念を基礎とし、四海の夷狄をその構成要素とする九服・九畿説についてのみ問題にするならば、それは、秦漢統一国家の成立、さらには武帝の对外積極戦略によって漢王朝の版図が判然と夷狄を含むようになるのをまって、はじめて構想しうるものである。なぜなら、秦が統一した四海（并兼四海）は、すべて分割して郡県とされたのであり（分天下為郡県）、『爾雅』が述べるような夷狄からなる「四海」を本質的に区別すべき領域としては含んでいないからである。九州と四海、中国と夷狄とを含む天下観念が構想されるためには、現実的に夷狄を版図に含むことが可能となつた武帝期以後のことでなければならぬ。¹⁸ かくして、漢王朝の実効的支配領域を背景にして構想された方万里の『周礼』の天下観念は、前漢末の『周礼』の礼経化をへてその権威を確立するとともに、『禹貢』五服説にも方五千里から方万里への調整を強いることになり、ここに天下に関する第三のスタンダードが成立することとなつた、と考えられるのである。

（二）王充の天下＝方万里と天下型國家

漢代人にとっては、天下＝方万里の領域観念は、漢王朝の実効的支配に即応するものであり、理解しやすいものであった。許慎が『尚書』

経古文学に左袒したのは、すでに見たように漢王朝の統治領域に合致したからである。後漢初期のリアリスト王充もその一人である。彼は、鄒衍の天下＝大九州説を否定するとともに、天下＝方五千里説を唱える儒者とも一線を画し、方万里の天下について興味ある独自の言説を展開している。

王充は、「禹貢の九州は、方今の天下九州なり（禹貢九州、方今天下九州也）」（『論衡』談天篇第三）と、天下＝九州説を主張している。この点は、経今文学の天下観念を継承しており、経古文学とは異なっている。王充の独自性は、天下をあくまで漢王朝の実効的支配にかかわらせて、現実的に理解しようとしているところにある。彼は、天下＝九州についてつぎのように述べている。

蕭何の秦に入るや、文書を收拾す。漢の能く九州を制する所以の者は、文書の力なり。文書を以て天下を御すれば、天下の富、家人の財に孰与れぞ（蕭何入秦、收拾文書。漢所以能制九州者、文書之力也。以文書御天下、天下之富、孰与家人之財。『論衡』別通篇第三八）

漢王朝の天下＝九州は、文書によつて実効的に支配される統治領域なのである。¹⁹ この実効的支配の及ぶ範囲について、彼はさらにつき述べている。

殷周の地は、五千里を極めるも、要服・荒服は、勤かに能く之を牧むるのみ。漢氏は土を廓げ、万里の外を牧め、要・荒の地は、褒衣・博帶す（殷周之地、極五千里、要服荒服、勤能牧之。漢氏廓土、牧万里外、要荒之地、褒衣博帶。『論衡』別通篇第三八）

見で、こう述べている。

皇帝、豊・沛に起こり、暴秦を討ち、彊楚を誅し、天下の為に利を興し害を除き、五帝三王の業を継ぎ、天下を統べ中国を理む。

中國の人は億を以て計え、地は方万里、天下の膏腴に居り、人衆・車輿、万物殷富にして、政は一家に由る。天地の剖判して自り、未だ始めより有らざるなり（皇帝起豐沛、討暴秦、誅彊楚、為天下興利除害、繼五帝三王之業、統天下理中国。中国之人以億計、

地方万里、居天下之膏腴、人衆車輿、万物殷富、政由一家。自天 地剖判、未始有也。『漢書』卷四三陸賈伝）

この発言から分かるように、天下方万里の認識が出現するのは、漢の高祖の天下統一からである。それは秦の天下統一にまでさかのぼるとみてよい。

周知のとおり、秦王政の二六年（前二三二）、秦は「初めて天下を并せ」「天下を分かちて以て三十六郡と為し、郡に守・尉・監を置」いた。その領域は「東は海暨び朝鮮に至り、西は臨洮・羌中に至り、南は北嚮戸に至り、北は（黃）河に據りて塞（長城）を為り、陰山に並いて遼東に至」った（以上、『史記』卷六秦始皇本紀二六年条）。天下は、秦の全国統一により、具体的な四至をもち、郡県に分割して統治される、実効的な支配領域となつたのである。

始皇帝は、その後、二七年（前二三〇）に西方の隴西・北地郡に巡行し、二八年・二九年には連続して東方巡行をおこない、二八年の帰路は衡山・南郡を経由し、二九年には之粟の東觀刻石に、「海隅に逮び、遂に之粟に登り、朝陽に昭臨」したと告げる。また三年（前二

一五）には北方巡行をおこない、碣石から「北辺を巡り、上郡従り」咸陽にもどり、三七年（前二二〇）には、南方巡行をおこない、「南海を望んで石刻を立て、秦の徳を頌い」、「親ら天下を巡り、遠方を周覽し」、ついに会稽山に登つたと告げる（以上、『史記』卷六秦始皇本紀）。始皇帝の五回にわたる四方巡行は、「今皇帝、海内を并一し、以て郡県と為し、天下和平」（琅邪刻石）となつた秦の統治領域、すなわち天下の、その四至を巡行せんとするものであった。¹⁷

陸賈の発言に見るような天下方万里の認識が可能になつたのは、秦によって方数千里を統治領域とする戦国期の諸国が統合され、あらためて三六郡に編成され、均一な実効的支配が出現したからである。『漢書』卷二八地理志序は、その経緯をつぎのごとく述べている。

陵夷して戦国に至り、天下分かれて七と為る。合從連衡すること

数十年を経、秦遂に四海を并兼す。周制微弱にして、終に諸侯の喪ぼす所と為ると以為い、故に尺土の封を立てず、天下を分かちて郡県と為し、前聖の苗裔を盪滅し、子遺有る者靡し。漢興り、

秦の制度に因り、恩徳を崇び簡易を行う……（陵夷至る戦国、天下分而為七。合從連衡、経数十年、秦遂并兼四海。以為周制微弱、終為諸侯所喪、故不立尺土之封、分天下為郡県、盪滅前聖之苗裔、靡有子遺者矣。漢興、因秦制度、崇恩徳行簡易）

秦が統合した四海天下は、郡県制によつて統治される実効的支配の領域となつた。この秦の制度を継いだ漢王朝の統治領域は、すでに言及したように、「地、東西九千三百一里、南北万三千三百六十八里」（『漢書』卷二八地理志下）であり、ほぼ方万里に合致していたのであ

戦国七雄国力一覧表

国名	領域	幕甲(人)	戦車	騎馬	出典(『戦国策』)
秦	方數千里	80 ~ 100 万	1000乘	10000匹	卷3(78頁・98頁)
齊	方三千里	80 ~ 100 万			卷8(337頁)・卷13(474頁)
楚	方五千里	100 万	1000乘	10000匹	卷14(500頁)
燕	方二千里	数十万	700乘	6000匹	卷29(1039頁)
韓	方千里	数十万			卷26(930, 934頁)
魏	方千里	70 万	600乘	5000匹	卷22(787, 790頁)
趙	方二千里	数十万	1000乘	10000匹	卷19(638頁)
宋	方五百里				卷32(1148頁)
中山	方五百里				卷5(190頁)

* 出典の巻数・頁数は、『戦国策』(上海古籍出版社、1978年)による。

合的比較は、戦国時代中後期の現実からそう遠いものではないはずである。

注目したいのは、比較的大きい領土を構成した楚・齊・秦の三国が、ほぼ方五千里、方三千里の領域をもつていたことである。これは、戦国中後期には、一国次元すでに天下方三千里、天下方五千里を凌駕する領域を構成したことを意味している。すなわち、すでに見た王制篇・孟子等の九州方三千里の天下観念は、戦国後期の実態からかなりへだたった認識を構成しているのである。九州方三千里の天下観念は、戦国中期以前、天下観念が形成されて間もない頃の全体的な領域認識の在り方を示したものと考えられる。¹⁶ それらは、一つの全体的な領域観念を示す観念素材として、孟子・『呂氏春秋』・王制篇にうけつがれ、天下認識の一つのスタンダードを構成したのである。

楚国が方五千里の領域を構成したことも注目に値する。言うまでもなく、『禹貢』の五服方五千里説を、すでに一国次元で実現しているからである。『禹貢』の制作年代からも分かるように、方五千里の天下観念は、秦の全国統一以前のものであり、また王制篇の方三千里の天下観念との対比から言えば、戦国前期にさかのぼるものでもない。それは、戦国前期から中期にかけて、戦国七雄の形勢が強固な基盤を獲得しはじめた頃に出現したものと考えられる。それは、戦国末の『禹貢』の制作とともに経典化され、漢代にはいって天下認識のもう一つのスタンダードを構成したのである。

天下方万里の観念は、管見の限りで言えば、戦国期以前の史料には現れない。それは、陸賈の発言に初めて現れる。彼は、南越王との会

つの基本認識を示すものであった。

以上、戦国中期に属する孟子の天下＝中国＝九州方三千里説から、後漢末の鄭玄による九州と四海（夷狄）とからなる天下方万里説にいたるまでを、主要な経書とその解釈によってあとづけてきた。その大要は、方三千里から方五千里へ、さらには方五千里から方万里へと拡大してゆく天下観念の展開過程であり、この展開過程の核心は、中国＝九州のみの天下から、中国と四海（夷狄）とからなる天下説への転換にある。中国と夷狄とからなる天下観念の判然とした出現は、劉歆による『周礼』の礼経化と関連するものであり、その時期は前漢末王莽期にあたる。換言すれば、中国における天下観念、国土についての觀念は、紀元前一世紀末から紀元後一世紀の初頭にかけて大きな転換期を迎えたと言えるであろう。

つぎなる問題は、このような経学上の領土認識の展開と前漢末王莽期における転換が、戦国期以来の現実の国家の発展とどのような関係をもって生起してきたのか、である。章をあらためよう。

二 戦国秦漢期における国家領域の拡大と天下型國家

前章では、経学上における天下の領域観念の展開をあとづけた。この章では、天下の領域観念の背景にあって、その展開を支えた戦国秦漢期の国家領域の在り方を確認し、経学上の観念領域との関係について考えてみたい。

(一) 戦国秦漢期における国家領域の拡大
戦国諸国の国家領域については、大局的に見たつぎのような馬服君の発言が残されている。

且つ古えは、四海之内、分かれて万国と為る。城は大なりと雖も、三百丈を過ぎる者無し。人は衆しと雖も、三千家を過ぎる者無し。而して集兵三万を以て此に距たれば、奚んぞ難からんや。今、古えの万国為る者を取り、分かちて以て戦国七と為す。……（且古者四海之内、分為万国。城雖大、無過三百丈者。人雖衆、無過三千家者。而以集兵三万距此、奚難哉。今取古之為万国者、分以為戦国七。『戦国策』卷二〇趙策三「趙惠文王三十年（前二六九）」条）

かつて万国に分かれていた「四海之内」＝天下は、現在は併合されて七国となっていると言うのである。「凡そ天下の戦国七、而して燕は弱きに處る（凡天下之戦国七、而燕處弱焉）」（『戦国策』卷二九燕策二）と言う蘇代の発言も、同様の認識を示している。戦国時代後期、天下＝「四海之内」は、七つの国によつて構成されるものであった。

天下を構成する戦国各國の領域は、「戦国七雄国力一覽表」に見るところである。最大の領域を誇る楚国は方五千里、東帝・西帝を称したことのある齊秦両国は方數千里、辺境をもつ燕趙両国は方二千里、中原に位置した韓魏両国はおおむね方千里であった。戦国各國の国力は、蘇秦等が遊説中に説き及んだものであつて説話化と成数化が顕著であり、その大略に過ぎない。しかし、軍事力を中核にする国力の総

明らかに『周礼』経古文学の九服方万里説をうけ、それとの整合性を図るものである。それは、他方で許慎『五經異義』が、「今之漢地を以て之を考るに、黒水自り東海に至るまで、衡山の陽より朔方に至るまで、万里を経略す。古尚書説に従う」と解釈を試みているように、現実の漢王朝の支配領域、すなわち「地、東西九千三百一里、南北万三千三百六十八里」（漢書卷二八地理志下）をふまえ、それとの整合性を図るものでもあつた。^{*15}

鄭玄は、王制篇の天下方三千里説、今文尚書家の方五千里説、『周禮』の方万里説をそれぞれ認めていた。彼は、三千里、五千里、万里を時代を異なる領域のちがいとして、歴史的に処理することにより、矛盾を解決しようとした。鄭玄は、先に見たように堯制を五服方五千里とし（『毛詩』殷武篇正義引皇陶謨鄭注。王制疏引鄭玄易注では、

黄帝・堯・舜の時代は、方万里とする）、王制の方三千里を殷制とし（王制「四海之内九州」条鄭玄注）、『禹貢』（夏制）を五服方万里とし、周制を九服方万里（『周礼』職方氏等）として理解する。各経書に見える天下・九州・四海の領域のくいちがいの根拠を、鄭玄のように五帝・夏殷周三代の歴史的な領域の変化に求める説は、こののちも『周禮』賈公彥疏などにひきつがれる。このような理解については、清末の孫詒讓がつぎのように批判している。

今考るに、禹貢の五服、地は實に五千里に止まり、周の要服の内七千里と同じからず。夏末殷初の中国三千里、武王の時の中国五千里も亦た文の証すべきもの無ければ、則ち王制注及び賈・孔が説く所の三代の土地の広狭の差、實に塙論に非ざるなり（今考

禹貢五服、地実止五千里、与周要服内七千里不同。夏末殷初、中國三千里、武王時中国五千里、亦無文可証、則王制注及賈孔所説三代土地広狭之差、實非塙論也。『周礼正義』卷六四職方氏・九服疏）

馬融・鄭玄・許慎三君、則ち並びに古文説に従い、禹貢と周と並びに方万里、王城以外、面ごとに五千里なり。故に王制疏に引く鄭玄易注に謂えらく、黃帝・堯・舜、地は方万里、三代の末、地は方五千里なり、と。実は則ち禹貢は面ごとに二千五百里、両面にして方五千里なり。此の經（『周礼』）の九服は面ごとに五千里、両面にして方万里なり。二經同じからず。禹貢を説く者は、当に古文書の義に従うべし。偏えに據るべからざるなり（馬鄭許三君、則並従古文説、

禹貢与周並方万里、王城以外、面五千里。故王制疏引鄭易注謂黃帝堯舜、地方万里、三代之末、地方五千里。實則禹貢面二千五百里、両面方五千里。此經九服面五千里、両面方万里。二經不同。説禹貢者、當從今文書義、説此經者、當從古文書義。不容偏據也。『周礼正義』卷五五大司馬・九畿疏）

孫詒讓が説くように、天下（中国）方五千里説および方万里説は、各經典に固有の文脈によつて理解されるべきである。二つの説は、古代中国人の天下観念の二つのスタンダードとみなすのが妥当である。これに王制篇の天下方三千里説を加えるならば、三つのスタンダードとなるだろう。それらは、五帝・三代以来の天下の歴史的変遷を表わすものではなく、古代中国の領域認識の展開のなかで生じてきた三

陽より朔方に至るまで、万里を経略す。古尚書説に従う（古尚書説、五服旁五千里、相距万里。許慎謹按、以今漢地考之、自黑水至東海、衡山之陽至朔方、経略万里。從古尚書説。）」と述べ、『尚書』経古文学が方万里説に立っていたことを告げている。

この天下＝方万里説は、『周礼』経古文学の天下＝方万里説をうけ、それとの整合を図るために、『禹貢』経今文学の方五千里説を増広して作りあげられたものである。その典型は、鄭玄の五服説である。鄭玄の五服説は、『尚書』皇陶謨（偽古文尚書益稷篇）の「惟れ荒に土功を度る。五服を弼成して、五千に至る（惟荒度土功。弼成五服、至于五千）」を参照して展開されたものである。この経文についての鄭玄注は、『毛詩』殷武篇「天命多辟、設都于禹之績」の正義に、つぎのごとく引用されている。

（鄭玄）注に云えらく、荒は奄なり。九州四海の土を奄大にし、土を敷きて既に畢り、五服を廣輔して之を成し、面ごとに各おの五千里に至る。四面相い距ること万里と為す。堯の五服を制するや、服ごとに各おの五百里。要服の内、四千里を九州と曰い、其の外荒服を四海と曰う。禹の弼る所の五服の残数も亦た服毎に各おの五百里なり。故に万里の界有り（皇陶謨云、惟荒度土功、弼成五服、至于五千。注云、荒奄也。奄大九州四海之土。數士既畢、廣輔五服而成之、至於面各五千里。四面相距為万里。堯制五服、服各五百里。要服之内、四千里曰九州、其外荒服曰四海。禹所弼五服之残数、亦每服者各五百里。故有万里之界焉。¹⁴）

鄭玄によれば、禹の治水によって、堯の制定した五服方五千里（一

服五〇〇里、一面二五〇〇里）が拡大され、一服五〇〇里にさらに五〇〇里を重ねて千里とし、五服方万里（一服千里、一面五千里）の領域が構成されたというのである。この場合、甸服・侯服・綏服・要服までの一面四千里（方八千里）が九州＝中国、その外にある荒服千里が四海の領域となる。

鄭玄の方万里弼成説は、清末の黃以周『礼書通故』封国通故第三九のように、これに賛成するものもあるが、簡朝亮（『尚書集注述疏』卷一皇陶謨）・孫詒讓（『周礼正義』卷五五大司馬・九畿疏）・皮錫瑞（『王制箋』自序「鄭注六失」）をはじめ、否定する見解が多数を占める。たとえば、我が息軒・安井衡は、鄭玄注を紹介したのち、つぎのように批判している。

衡謂えらく、周礼の九服、禹貢の五服に与いて、殆ど四倍の数有り。故に鄭は弼成の説を創り、以て之を彌縫す。然れども堯の初年、既に南交・幽都の文有れば、則ち所謂弼成なる者は、水を治め土を敷き、其の成らざるを輔して之を成すものに過ぎず。堯の境を斥いて之を倍にするに非ざるなり（衡謂、周礼九服、与禹貢五服、殆有四倍之数。故鄭創弼成之説、以彌縫之。然堯之初年、既有南交幽都之文、則所謂弼成者、不過治水敷土、輔其不成而成之。非斥堯境而倍之也。『書說摘要』卷一皇陶謨）

『禹貢』経今文学の場合、許慎『五經異義』に見たとおり、五服方五千里は中國の領域とみなされた。経古文学の場合には、鄭玄説に見るところ、領域の拡大とともに、九州＝中国と四海＝夷狄とからなる複合領域として理解されるにいたる。それは安井息軒が喝破するように、

神州。復更有八州、每一州者四海環之。名曰裨海。九州之外、更有瀛海)

王充は、鄒衍の天下＝大九州説を真偽分かちがたい奇異の説として批判する。ただその学説の理解は、鄒衍の念頭にはなかった『禹貢』が前提としてあり、やや不正確である。しかし、『禹貢』の九州が現在（後漢）の天下であり、鄒衍の天下＝大九州説にあっては一州として位置づけられ、その周りを四海（裨海）がとりまいており、さらに大九州を瀛海がとりまいている、と理解しているのは重要である。後漢初期においても、天下九州の周囲には海がとりまいているという観念の存続していることが分かるからである。これら大九州説の理解によれば、州とは洲のことであり、河の中洲のように周りを水で囲まれた領域であることが分かる。戦国中期から後漢にいたるまで、四海の観念の中核は、字義どおりの海域もしくは境界を意味するものであった。

この四海の観念が海域ではなく、九州の外延に広がる領域であるといふ観念は、戦国後期にはすでに出現していた（後述）。ただ、儒家文献についていえば、四海を人の住む、とりわけ夷狄の住む領域として観念するにいたるのは、管見の限りで言えば、『爾雅』釈地からである。

『周礼』職方氏の九服説を中心とする、九州と四海すなわち中国と夷狄とからなる方万里の天下説は、その領域の広さと四海の理解から考えて、論理的にも歴史的にも、中国＝九州＝天下説をとる王制篇・『尚書』經今文学のあとをうけて出現したものとみなさざるをえない。

四 「禹貢」五服の経古文学説——方万里＝九州＋四海説

伝統的には、『爾雅』三卷一九篇のうち、釈詁一篇は周公旦の作とされ、釈言以下諸篇は孔子・子夏・叔孫通・梁文等の増補したものと言われる（『經典釈文』序録）。『爾雅』は、今までこそ経書の一つに数えられるが、元来は辞書の一つであり、その成立も比較的新しいもの

である。姚際恒は、その『古今偽書攷』のなかで、「元来は偽書ではないが、後人が妄りにその人に仮託した」書籍中に分類し、「離騷」（戰国末）の後から漢代にかけての作とする。呂思勉は、『爾雅』の「訓詁篇はほとんど全て（詩經）毛傳と同じであり、釈樂篇も周官（周禮）大司樂と同じである。九州（の名称）は『禹貢』とは異なるが周官と同じであるから、古文学が出現してから後の物である」と指摘している（『經子解題』商務印書館、一九二六年、八二頁）。余嘉錫も、『爾雅』の本文・注文の考証をふまえて、その成立を武帝以後、平帝以前のこととしている（『四庫提要弁証』卷二『爾雅注疏』）。これらによれば、『爾雅』の内容は、経古文学との関連が深く、前漢後期に最終的な編纂がなされたということになる。四海を夷狄の住む領域とする観念も、すでに見たように『周礼』と関連が深く、漢代以前に遡りうるものではないであろう。¹³

もとづく方万里の天下は、九州＝中国と四海＝夷狄との二つの領域からなる複合政治社会——「帝国」として観念されるにいたる。

経古文学における天下観念の特徴は、領域が方三千里乃至方五千里から方万里に拡大するとともに、『爾雅』积地を媒介にして四海が領域化され、夷狄を構造的に包摂するに至ったところにある。方万里への領域の拡大が何故起きたのか、その根拠については後に述べることにし、ここでは四海の領域化について考えておきたい。

四海の観念は、戦国時代には、文字どおり海域を表わすものであった。たとえば、『孟子』告子篇下は、つぎのような問答を残している。

白圭曰く、丹の水を治むるや、禹に愈さる、と。孟子曰く、子、過まてり。禹の水を治むるや、水を之れ道びくなり。是の故に禹は四海を以て壑と為す。今吾子は鄰国を以て壑と為す。水の逆行する、之を洚水と謂う。洚水は洪水なり。仁人の惡む所なり。吾子、過まてり、と（白圭曰く、丹之治水、愈於禹。孟子曰く、子過矣。禹之治水、水之道也。是故禹以四海為壑。今吾子以鄰國為壑。水逆行謂之洚水。洚水者洪水也。仁人所惡也。吾子過矣）

四海は、ここでは水の流入する谷として理解されている。四海は、人の住む領域ではなく、海域もしくは境界領域としてとらえられている。また、伏生の著作とされる『尚書大伝（陳寿祺定本）』卷二禹貢条には、前漢の経今文学派の四海についての認識がつぎのように記されている。

夏は五服を成し、外、四海に薄る。東海の魚須・魚目、南海の魚革・珠璣・大貝、西海の魚骨・魚幹・魚脅、北海の魚剣・魚石・

出瑣・擊闔、……咸な中国に会し、異物來至す（夏成五服、外薄

四海。東海魚須魚目、南海魚革珠璣大貝、西海魚骨魚幹魚脅、北

海魚劍魚石出瑣擊闔、……咸會於中國、異物來至）

これによれば、東海・南海・西海・北海の四海から中国に貢納されるものはすべて海産物である。前漢の経今文学派が『禹貢』末尾の「東漸于海、西被于流沙、朔南暨声教、訖于四海」に見える四海を海域としてとらえていたことは明らかである。

さらに鄒衍の大九州説を参考することができる。孟子にやや後れた出た鄒衍は、あらましつぎのよう天下＝大九州説をとなえた。儒家の所謂中国、すなわち禹が秩序立てた九州＝赤県神州は、天下の一分为一でしかなく、本来州と呼べないものである。中国と同様の領域が九つ集まつたものが所謂九州であり、そこは裨海がとりまいていて、人間・生物が往来できない区域であり、これが一州である。このような州が九つあって、その外側を大瀛海がとりまいており、天地の境界をなしている、と。¹² ところで、後漢の王充『論衡』談天篇第三は、鄒衍の大九州説を紹介して、つぎのように述べている。

鄒衍の書に言えらく、「天下に九州有り、禹貢の土は、所謂九州なり。禹貢の九州は、所謂一州なり。禹貢以上の若き者九あり。

禹貢の九州は、方今の天下九州なり。東南隅に在り、名づけて赤縣神州と曰う。復た更に八州有り、一州毎に四海之を環る。名づけて裨海と曰う。九州の外、更に瀛海有り」と（鄒衍之書言、天下有九州、禹貢之土、所謂九州也。禹貢九州、所謂一州也。若禹貢以上者九焉。禹貢九州、方今天下九州也。在東南隅、名曰赤県

え、其の貢は服物なり。又た其の外方五百里、之を衛服と謂う。

五歳ごとに壹たび見え、其の貢は材物なり。又た其の外方五百里、之を要服と謂う。六歳ごとに壹たび見え、其の貢は貨物なり。九州の外、之を藩国と謂う。世にして壹たび見え、各おの其の貴ぶ所の宝を以て摯と為す（邦畿方千里。其外方五百里謂之侯服。歲壹見、其貢祀物。又其外方五百里謂之甸服。二歳壹見、其貢殽物。又其外方五百里謂之男服。三歳壹見、其貢器物。又其外方五百里謂之采服。四歳壹見、其貢服物。又其外方五百里謂之衛服。五歳壹見、其貢材物。又其外方五百里謂之要服。六歳壹見、其貢貨物。九州之外、謂之藩国。世壹見、各以其所貴宝為摯）

この六服の領域について、鄭玄は、「要服は蛮服なり。此の六服は王城を去ること三千五百里、相い距ること方七千里、公侯伯子男焉に封ぜらる（要服、蛮服也）。此六服去王城三千五百里、相距方七千里、公侯伯子男封焉」と説明している。すなわち、この六服のうち最後の要服は、職方氏の蛮服に相当し、邦畿（王畿）と六服とをあわせて方七千里の領域を構成すると指摘するのである。

鄭玄は、さらに「九州の外、之を藩国と謂う」を解説してつぎのように述べている。

九州の外とは、夷服・鎮服・藩服なり。曲礼に曰く、其れ東夷・北狄・西戎・南蛮に在りては、大なりと雖も子と曰う、と。春秋の伝（左伝僖公二七年）に曰く、杞は伯なり。夷の礼を以う。故に子と曰う、と。然らば則ち九州の外、其の君は皆な子男なり。朝貢の歲無し。父死し子立ち、及び嗣王即位すれば、乃ち一たび

来るのみ。各おの其の貴ぶ所の宝を以て摯と為せば、則ち藩国の人君、玉瑞を執る者無し。是を以て其の君を謂いて小賓と為し、臣を小客と為すなり（九州之外、夷服鎮服藩服也。曲礼曰、其在東夷北狄西戎南蛮、雖大曰子。春秋伝曰、杞伯也。以夷礼。故曰子。然則九州之外、其君皆子男也。無朝貢之歲。父死子立、及嗣王即位、乃一來耳。各以其所貴宝為摯、則藩国之君、無執玉瑞者。是以謂其君為小賓、臣為小客）

鄭玄によれば、六服＝方七千里が九州の領域にあたり、九州の外に展開する藩国は、職方氏の夷服・鎮服・藩服に相当し、東夷・北狄・西戎・南蛮からなる夷狄の領域として理解される。職方の夷服・鎮服・藩服が藩国に一括されたのは、九州＝中国の外にあり、朝貢方式を同一にする夷狄の領域だったからである（一九頁「天下四海図」参照）。

前述の職方氏の注釈で、鄭玄は「此の率を以て偏く四海・九州の邦國の多少の数を知るなり」と述べ、大行人の九州＝中国の外に位置する藩国、すなわち夷狄の領域を四海と呼んでいる。四海については、秋官・布憲の「布憲は憲邦の刑禁を掌る……以て四方の邦国とその都鄙とを詰ましめ、四海に達す（布憲、掌憲邦之刑禁。……以詰四方邦國、及其都鄙、達于四海）」を解説して、鄭玄は、「爾雅に曰く、九夷・八蛮・六戎・五狄、之を四海と曰う」と、「爾雅」釈地を参照している。『周礼』九服（九畿）について、『周礼』の経文自身は、内部六服を九州の地、外部三服を夷狄の地＝藩国として叙述している。この夷狄の地である外部三服＝藩国を九州に対比し、『爾雅』の記述によって四海と位置づけたのが鄭玄である。かくして、『周礼』経古文学に

鄙・四夷・八蛮・七閩・九貉・五戎・六狄の人民と其の財用、九穀・六畜の数要とを辨じ、其の利害を周知す（職方氏、掌天下之図、以掌天下之地、辨其邦国都鄙四夷八蛮七閩九貉五戎六狄人民与其財用、九穀六畜之数要、周知其利害）

これによれば、職方氏が管理する天下の地図のなかに、中国のみならず周囲の夷狄が含まれることは明らかである。この中国と夷狄とからなる天下の領域は、つづく九州説と九服説とによって、より構造的に説明される。

揚・荊・豫・青・兗・雍・幽・冀・并の九州の領域と山川藪沢・物産を記したのち、職方氏は、九服についてつぎのように述べている。

乃ち九服の邦国を辨ず。方千里を王畿と曰う。其の外方五百里を侯服と曰い、又た其の外方五百里を甸服と曰い、又た其の外方五百里を男服と曰い、又た其の外方五百里を采服と曰い、又た其の外方五百里を衛服と曰い、又た其の外方五百里を蛮服と曰い、又た其の外方五百里を夷服と曰い、又た其の外方五百里を鎮服と曰い、又た其の外方五百里を藩服と曰う。凡そ邦国千里ごとに、公を封するに方五百里を以てすれば、則ち四公あり、方四百里なれば則ち六侯あり、方三百里なれば則ち七伯あり、方二百里なれば則ち二十五子あり、方百里なれば百男あり、以て天下を周知す（乃辨九服之邦国。方千里曰王畿。其外方五百里曰侯服、又其外方五百里曰甸服、又其外方五百里曰男服、又其外方五百里曰采服、又其外方五百里曰衛服、又其外方五百里曰蛮服、又其外方五百里曰夷服、又其外方五百里曰鎮服、又其外方五百里曰藩服。凡邦国

千里、封公以方五百里則四公、方四百里則六侯、方三百里則七伯、方二百里則二十五子、方百里則百男、以周知天下）

侯服から藩服にいたるまでの九服は、それぞれ五百里ずつの距離をもって設定されており、合計すると各面ごとに四千五百里となる。これに王畿の方千里すなわち中心の王城から各面五百里を加えると、一面五千里、東西南北それぞれ一万里の方万里となる。

鄭玄は、諸侯の封域を規定した後半の「凡邦国千里……以周知天下」に注釈して、「此の率を以て徧く四海・九州の邦国の多少の数を知るなり（以此率徧知四海九州邦国多少之数）」と述べ、天下＝九服が四海と九州とからなることを指摘する。さらにつづけて、「周の九州の界は方七千里、七七四十九、方千里なる者四十九、其の一を畿内と為す。餘は四十八、八州各おの方千里なる者六有り（周九州之界、方七千里。七七四十九、方千里者四十九、其一為畿内。餘四十八、八州各有方千里者六）」と解説する。九州＝方七千里とは、王畿を含め、その外に展開する侯服・甸服・男服・采服・衛服・蛮服の六服の領域（一面三五〇〇里）である。

ところで大行人には、六服＝九州からの朝貢とそれ以外の領域からの朝貢との区別について、つぎのように記述している。

邦畿は方千里。其の外方五百里、之を侯服と謂う。歳ごとに壹たび見え、其の貢は祀物なり。又た其の外方五百里、之を甸服と謂う。二歳ごとに壹たび見え、其の貢は嬪物なり。又た其の外方五百里、之を男服と謂う。三歳ごとに壹たび見え、其の貢は器物なり。又た其の外方五百里、之を采服と謂う。四歳ごとに壹たび見

（帝王之德有優劣、所以俱称天子者何。以其俱命于天、而王治五千里内也。尚書曰、天子作民父母、以為天下王）

これによれば、天命を受けた天子が王として統治する方五千里の領域が天下なのである。『白虎通德論』は、章帝建初四年（後七九）に、白虎觀に博士・諸生など諸儒を集めて五經の異同を講論させ、章帝自らがその判定を下した欽定解釈集であり^{*8}、この天下觀念は漢王朝の正統的觀念とも言うべきものであった。清の陳立は、この記述を「これ今文尚書説なり」（『白虎通疏証』卷二）と断定し、先に紹介した王制篇正義所引『五經異義』を参照している。正しい判断だと言つてよい。以上のように、天下＝中国＝九州＝四海之内の領域を方五千里ととらえるのが『尚書』経今文学の基本的立場であり、それは、『尚書』禹貢篇の九州説に五服説が接合されたところに生まれてきた解釈なものであった。それはまた、北は恆山、南は衡山、東は東海、西は流沙に至るまでの、具体的な四至にかこまれた方三千里の領域を中国＝九州＝四海之内ととらえる『礼記』王制篇の天下觀念とは次元の異なる、より複合的な理解を示すものとなつた。^{*9}

(3) 『周禮』九服・九畿説——方万里＝九州十藩国（四海）説
『尚書』経今文学の天下＝方五千里説についてでは、天下＝方万里説に立つ『尚書』経古文学の所説を紹介するのが順当かもしれない。しかし、『尚書』経古文学の天下＝方万里説を理解するためには、その前に同じく経古文学の根本經典ともいすべき『周禮』の天下＝方万里説について、その内容を理解しておく必要がある。『尚書』経古文学

の天下＝方万里説は、觀念的素材として『周禮』の天下＝方万里説を前提にしているからである。

『周禮』は、周王朝の古典的典章制度を記したとされる天官冢宰・地官司徒・春官宗伯・夏官司馬・秋官司寇・考工記（冬官）の六篇からなる。『周禮』は、漢初景帝期に河間獻王劉德の經書収集活動のかで発見された『周官』六篇に由来するとされ、前漢未成帝期に世に出るようになつた書籍である。王莽期には、劉歆の上奏によつて礼經とされ、博士が設置され、官学となつた（『漢書』卷三十三王伝、『隋書』卷三三經籍志）。このような經緯をもつ『周禮』の成書年代については、様ざまな疑惑や問題があり、あつかいのむつかしい經書である。王莽政権の成立にも重要な役割を果たしたと考えられたため^{*10}、清末の公羊学者である康有為などからは、偽書と断定されてもいる（『新學偽經考』卷二上、錢玄同「重印新學偽經考序」北平文化学社、一九三一年）。

ともあれ『周禮』は、後漢期には、代表的な經古文学の經典として研究され、同じく古典的典章制度を記した経今文学の王制篇と対比される存在であった^{*11}。この王制篇の天下＝中国＝方三千里説にたいして、『周禮』は、天下＝方万里説を展開する。その内容は、夏官・大司馬の九畿説、秋官・職方氏の九服説、大行人の職掌の三箇所に表わされている。大司馬九畿説は、職方氏の九服説とほぼ同じであり、ここでは先ず、職方氏の職掌を紹介することから始めたい。

職方氏は、天下の図を掌り、以て天下の地を掌り、其の邦国・都

海、西被于流沙、朔南暨声教、訖于四海)

五服内部の具体的な内容については、煩瑣になるので、ここでは問題にしない。問題にしたいのは、中心をなす天子の王城から順次外へ向かって五百里ごとに甸服・侯服・綏服・要服・荒服の五つの領域を設定し、天子に対する服従・貢納義務を述べている点である。王城から順次外へ向かって各服五百里であるから、東西南北一方面ごとに五百里×五服、五五二千五百里となる。したがって全体として言えば、方五千里となる。偽孔安国伝が「凡そ五服相い距ること方五千里なり」と解釈し、孔穎達正義が「凡そ五服の別、各おの五百里、是れ王城の四面、面別に一千五百里、四面相い距ること方五千里なり」と敷衍するのは、自然な読み方である（一九頁「天下四海図」参照）。『尚書』経古文学がこれを方万里と理解するのは、別に理由があるからなのが、それは後述する。

この方五千里の五服の範囲が五服の前段に展開される九州説と合体して理解されると、禹の治跡である九州＝中国は、必然的に方五千里の領域として認識されるようになる。たとえば、後漢初期の王充『論衡』難歲篇第七三は、つぎのように経今文学説を紹介している。

儒者の天下九州を論ずるに、以為らく、東西南北、地の広長を尽し、九州の内、五千里の竟（境）、三河は土の中なり……（儒者論天下九州、以為東西南北、尽地広長、九州之内、五千里竟、三河土中）

天下九州の東西南北の内側を五千里四方の境域、その中心を洛陽と考える儒者は経今文学に立つ人びである。彼らの考えは、他にも「舜

と堯とは俱に帝たる者なり。五千里の境を共にし、四海の内を同じうす」（書虚篇第一六）、「夫れ唐と周と、俱に五千里の内を治む」（藝增篇第二七）、「案するに周時の九州、東西五千里、南北も亦た五千里なり。五五二十五、一州は二万五千里、天下此の若し。之を九にして二万五千里を乗すれば、二十二万五千里なり（案周時九州、東西五千里、南北亦五千里。五五二十五、一州者二万五千里、天下若此。九之乘二万五千里、二十二万五千里）」（王充の五五二十五、一州二万五千里の計算法は理解不能である）（談天篇第三二）などと見える。王充が批判的に紹介する儒者の天下九州は、「四海之内」＝方五千里の領域なのであった。

また、前漢の『鹽鐵論』地廣第一六にも文学の発言がつぎのように記されている。

文学曰く、古えは天子の天下の中に立つや、県内〔畿内〕は方、千里を過ぎず。諸侯・列国は不食の地に及ばず。禹貢の五千里に至るまで、民各おの其の君に供し、諸侯は各おの其の国を保つ（文学曰、古者天子之立於天下之中、縣内方不過千里。諸侯列國、不及不食之地。禹貢至于五千里、民各供其君、諸侯各保其國）

このように、天子の県内（畿内）＝方千里、『禹貢』の天下＝方五千里とする文学の観念は、王充が紹介する儒者たちの考えに同じい。

さらに、後漢の班固『白虎通德論』爵条にも、つぎのごとくある。

帝王の徳に優劣有るも、俱に天子と称する所以は、何ぞや。其の

俱に天より命ぜられて、王として五千里の内を治むるを以てなり。

尚書に曰く、天子は民の父母と作り、以て天下の王と為る、と。

て伝え、のちに当時の通行字体である隸書（今文）によって写定されたテキスト二九篇に基づく『尚書』解釈学であり、歐陽説・大夏侯説・小夏侯説の三家があつた。ちなみに古文尚書は、武帝末年に、魯の共

王がその宮殿を拡張しようとして孔子の旧宅をとり壊した時、その壁中から発見されたテキストである。先秦期の古い字体（古文）で書写されていたので、古文尚書と呼ばれ、今文尚書より一六篇多かつたとされる。このテキストに基づく尚書解釈学が『尚書』経古文学である（『漢書』卷三〇藝文志、尚書条）。

『尚書』経今文学による禹貢篇の体系的な天下理解は残されていない。その内容は、『尚書』経古文学説との対比の中でわずかに言及されるにすぎない。孔穎達『礼記』正義は、王制篇の「九州千七百七十三国」の解釈にかかわって、許慎『五經異義』を引いてつぎのように述べている。

又た異義に、「今尚書歐陽、夏侯説は、中国方五千里とす。古尚書説は、五服の旁（面）ごとに五千里、相い距ること万里とす。許慎謹んで接するに、今の漢地を以て之を考うるに、黒水自り東海に至るまで、衡山の陽より朔方に至るまで、万里を経略す。古尚書説に従う」とあり。鄭氏は駁すること無く、許と同じ。……

（又異義、今尚書歐陽・夏侯説、中國方五千里。古尚書説、五服旁五千里、相距万里。許慎謹按、以今漢地考之、自黑水至東海、衡山之陽至朔方、経略万里。従古尚書説。鄭氏無駁、与許同）

許慎『五經異義』によれば、『尚書』経今文学では中国方五千里説に立ち、経古文学では方万里説に立っていたことが分かる。許慎は、

後漢の支配領域を参照して古文学説に左袒しており、孔穎達正義によれば、鄭玄『駁五經異義』にも反対はなく、許・鄭ともに方万里説に立っていたことが分かる。

中国方五千里説と方万里説との分歧は、「古尚書説、五服旁五千里、相距万里」とあることから分かるように、禹貢篇の五服の理解の違いにあった。そこでまず、経文の五服説の記述を参考することにしよう。禹貢篇は、こう述べている。

〔王城を去ること〕五百里は甸服なり。〔甸服内の〕百里は賦として總を納め、二百里は銓を納め、三百里は桔を納めて服し、四百里は粟、五百里は米なり。

〔甸服の外〕五百里は侯服なり。〔侯服内の〕百里は采、二百里は男邦、三百里は諸侯なり。

〔侯服の外〕五百里は綏服なり。〔綏服内の〕三百里は文教を揆り、〔文教外の〕二百里は武衛を奮う。

〔綏服の外〕五百里は要服なり。〔要服内の〕三百里は夷、二百里は蔡なり。

〔要服の外〕五百里は荒服なり。〔荒服内の〕三百里は蛮、二百里は流なり。

東は海に漸り、西は流沙に被び、朔南に声教を暨ぼし、四海に訖る。……（五百里甸服。百里賦納總、二百里納銓、三百里納桔服、四百里粟、五百里米。五百里侯服。百里采、二百里男邦、三百里諸侯。五百里綏服。三百里揆文教、二百里奮武衛。五百里要服。三百里夷、二百里蔡。五百里荒服。三百里蛮、二百里流。東漸于

地、其方千里、是有天下九分之一也)」(『孟子集註』)と述べている。

『孟子』の著述年代は、同時代性が高いと言われ、この問答が戦国中期の天下觀を反映していることは疑いない。そうしてこの天下認識が、宋学の大成者である朱熹によって確認されていることにも注意しておきたい。

天下は、戦国中期から漢初にいたるまで、「四海之内」・方三千里の領域であり、方千里の地を九つ組み合わせた九州からなる天子の統治領域なのであった。

(二)『禹貢』五服の經今文学説——方五千里・九州説——

『礼記』王制篇の天下・九州説にかかわって、つぎに問題になるのは『尚書』禹貢篇である。禹貢篇は、九州の具体的な叙述を展開するが、『礼記』王制篇のように経文のなかで直接的に天下を指示し、その内容を記述するものではない。しかし漢代に入つて、禹貢篇の二大部分をなす九州説と五服説との解釈、とりわけ五服説の解釈にかかわつて、天下に関する異なる理解が生み出された。『尚書』にかかる経今文学と経古文学との解釈の違いである。ここでは先ず、前後漢期をつうじて官学的見解をなした『尚書』經今文学に基づく天下觀念をとりあげることにしよう。

具体的な考察に入る前に、小論の展開に必要なかぎりで、『尚書』禹貢篇について、その特色を述べておきたい。禹貢篇は、伝來の素材

をもとに戦国末の秦國で編纂された儒家の經典である。禹貢篇は、大きく分けて九州説と五服説との二つの部分からなる。九州説では、各

州ごとの土壤類型・田租等級・賦税等級および貢献物の種類を記し、五服説では、中心をなす天子の王城から順次外へ向かって五百里ごとに甸服・侯服・綏服・要服・荒服の五つの領域を設定し、それぞれに異なる中央への服属義務を規定している。

注意すべきは、異なる九つの領域の集合として全体をとらえる九州説の領域観念と五段階にわけて中心から周辺へ重層的に展開する五服説の領域観念とでは明らかに世界觀が異なっていることである。そのうえ、それぞれの服属・貢獻の内容に大きな違いがあることを考慮するならば、九州説と五服説とでは全く異なる考え方立つて全体が構想されているといわざるをえない。

また禹貢篇の大部分をなす九州説では、九河・九江・九川・九山・九沢など九を多用するが、五服説に限つて五を用いている。九を重用する点から言えば、『周禮』の諸篇に散見する九服・九畿説(後述)を用いても良いはずであるが、そうなつてはいけない。さらに禹貢篇の五服説は、ほぼ同様の記述が『國語』周語上・『荀子』正論篇第一八等にも見え、それらは九州説とは全く無関係に叙述されている。禹貢篇の九州説と五服説とは、本来由来を異にする素材が、禹貢篇の最終的な編纂の過程で合体されたものと考えられる。本来異なる領域観念に立つ九州説と五服説とが合体されたところに様ざまな解釈を生み出する根本的原因が存在するのである。

禹貢篇の二大部分をなす九州説と五服説との整合的解釈に基づく天下認識は、先ず前漢期の『尚書』經今文学の解釈として生み出された。『尚書』經今文学は、秦の焚書のあとをうけ、漢初の伏生が口誦によつ

い、天子の老二人に属す。天下を分ち以て左右と為し、二伯と曰う（千里之外設方伯……州有伯、八州八伯……八伯各以其属、属天子之老二人。分天下以為左右、曰二伯）と述べ、八州の方伯が更に天子の長老である二人の伯に分属することを説く。天子の二人の長老は、天下を東西に二分して八州の方伯を統領するのであり、王制篇が構想する天下の領域は、具体的な四至をもつて区画される方三千里の「四海之内」「九州」の政治的空間であることが分かる。

王制篇と同様の天下觀は、戦国末期の秦国で編纂された『呂氏春秋』審分覽慎勢篇でもつぎのように表現されている。

およそ礼制になつた服装を身につけ、水陸の交通が通じあい、通訳を必要としない領域は、三千里四方である。古えの王者は、この天下の中心を選んで畿内の領域とし、畿内の中心に宮殿を建造し、宮殿の中心に宗廟を建立した。天子がこのように千里四方の地をもつて畿内の領域とするのは、天下の中枢として統治するためである（凡冠帶之国、舟車之所通、不用象訛狄鞮、方三千里。古之王者、抝天下之中而立國、抝國之中而立宮、抝宮之中而立廟。天子之地、方千里以為國、所以極任治也。）

このように戦国末期の秦国ではすでに、共通の政治文化をもち、同一の交通圏と言語圏にある三千里四方の領域を天下として認識していた。この認識は、今日の我われが常識的に抱いている国民国家觀に酷似している。また同じ『呂氏春秋』季冬紀（『礼記』月令篇同じ）にも、「凡そ天下九州の民に在りては、咸な其の力を献じ、以て皇天上帝・社稷・寝廟・山林・名川の祀に供せざること無し（凡在天下九州

之民者、無不咸獻其力、以供皇天上帝社稷寝廟山林名川之祀）」と述べ、天子が主宰する諸祭祀にあたって、天下九州の人民がその労力を提供することを説いている。戦国末の秦国にあっては、天下の領域は九州から成り立ち、天子が統治する同一政治文化圏として観念されていたのである。

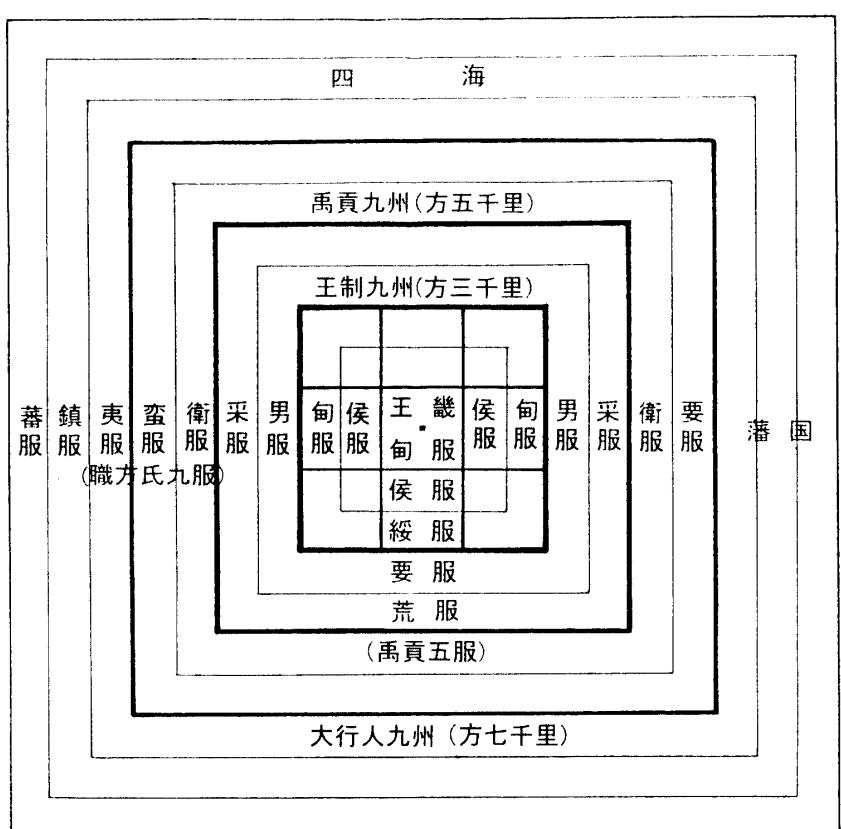
このような認識は、いま少しく遡及して孟子の時代にまでたどりつくことができる。『孟子』梁惠王上篇で、孟子は、齊の宣王とつぎのような問答を交わしている。

……（孟子）曰く、鄒人と楚人と戰えば、則ち王以為うに孰か勝つ、と。〔宣王〕曰く、楚人勝つ、と。（孟子）曰く、然らば則ち小固より以て大に敵す可からず、寡固より以て衆に敵す可からず、弱固より以て強に敵す可からず。海内外の地、方千里なる者九。齊は其の一を集有するも、一を以て八を服せば、何を以てか鄒の楚に敵するに異ならん哉。……（曰、鄒人与楚人戰、則王以為孰勝。曰、楚人勝。曰、然則小固不可以敵大、寡固不可以敵衆、弱固不可以敵強。海内外の地、方千里者九。齊集有其一、以一服八、何以異於鄒敵楚哉）

孟子は、「海内之地」すなわち「四海之内」が九つの方千里の領域から成り立ち、齊国が方千里を領有していることを指摘している。方千里の領域を九つ組み合わせれば、『礼記』王制篇・『呂氏春秋』慎勢篇に同じく、「海内之地」が方三千里の領域になることは明らかである。南宋の朱熹は、「齊集有其一」を解釈して「言うこころは、齊の地を集合して、其の方千里、是れ天下九分の一を有つなり（言集合齊

王制篇は、具体的な「四海之内」の統治領域をつぎのように述べて
いる。

恒山自り南河に至るまで、千里にして近（短）し。南河自り江（長江）に至るまで、千里にして遠（長）し。江自り衡山に至るまで、千里にして遙（長）し。東河自り東海に至るまで、千里に



して遙（長）し。東河自り西河に至るまで、千里にして近（短）し。西河自り流沙に至るまで、千里にして遙（長）し。西は流沙を尽さず、南は衡山を尽さず、東は東海を尽さず、北は恒山を尽さず。凡そ四海之内、長きを断ち短きを補えば、方三千里、田を為むること八十万億一万億畝なり。（自恒山至南河、千里而近。自南河至衡山、千里而遙。自江至衡山、千里而遙。自東河至東海、千里而遙。自東河至西河、千里而近。自西河至流沙、千里而遙。西不尽流沙、南不尽衡山、東不尽東海、北不尽恒山。凡四海之内、断長補短、方三千里、為田八十万億一万億畝）

このように、王制篇は、北は恒山（漢の常山郡上曲陽県、現河北省曲陽県西北）、南は衡山（漢の長沙郡湘南県、現湖南省衡山県東南）、東は東海、西は流沙（漢の張掖郡居延県東北の居延沢）に至る「四海之内」を長短補正して三千里四方（一一四二km × 一一四二km = 一五四万平方キロメートル）の領域とし、具体的な四至をもって明確に区別する（「天下四海図」参照）。

この四海に囲まれた方三千里の領域は、「凡そ四海之内に九州あり。州ごとに方千里……（凡四海之内、九州。州方千里）」とあるように、一州千里四方の領域を九つ組み合わせた九州の領域として構想され、その中心にある一州千里四方の領域は、「天子之田」・「天子之境内」すなわち天子の直接統治する畿内として区画される。

「天子之県」方千里の外にある八州には、それぞれ方伯が設置され、各州に所属する国が統括される。かくして王制篇は、「千里の外に方伯を設く……州に伯有り、八州に八伯あり……八伯各おの其の属を以

うな政治社会のありかたを天下型国家として規定することを提起した。前稿でも検討したように、日本の研究者の中には、天下をめぐつて二つの異なる認識が存在する。一つは、天下を端的に九州＝中国であると考へる山田統・安部健夫氏等の天下＝中国説であり、いま一つは、天下を無限に広がる世界、あるいは中国と夷狄とからなる世界であると考える平岡武夫・堀敏一・石上英一・村井章介諸氏等の世界説もしくは世界帝国説である。これらに対し、私は、唐代中国の事例を検証しながら、天下を編戸百姓に対する実効的支配の領域としてとらえることにより、具体的には九州＝中国を基本的領域としつつも、ときには異民族支配を包摂することができうるような政治社会として、天下型国家概念を措定したのである。

戦国秦漢期の天下観念については、山田統・安部健夫両氏が詳細な研究を行っており、もはや屋下に屋を架す必要はないごとくである。ただ両氏は、伝統中国の知識人の世界観を規定した経学上の天下概念を必ずしも系統的に検討しているわけではない。経学上の天下概念を仔細に検討してみると、そこには天下を九州＝中国ととらえる場合と夷狄を含んだ領域を指示する場合とがあり、この二つの天下観は、伝統中国の諸文献のなかにも様ざまな形で色濃く反映していることが分かる。天下＝中国説と天下＝帝国説とは、中国の伝統的世界観のなかにそれぞれ根柢をもっているのである。そこで本稿では、古典的な国家観が形成されてゆく時期である戦国秦漢期を対象としてとりあげ、上述の二つの天下観のありかたとその生成の過程とを明らかにするこにより、あらためて天下型国家概念を措定する意味を問い合わせし、天

下を指標とする伝統中国の領域認識の特質および古典的国家観念の成立の解明に立ち向かうことにしたい。

一 経学上の天下観念——拡大する天下観

戦国期から後漢期にかけて編纂された経書とその解釈とのなかに表れる天下観の特色は、一言でいえば「拡大する天下」である。天下は、戦国中期には方三千里の九州＝中国の領域として認識されていたが、後漢末の鄭玄の天下観にいたって夷狄を含む方万里の帝国領域として観念されるにいたる。^{*3} それらは、領域の広さから分類すれば、方三千里、方五千里、方万里の三つのタイプに区分できるが、それらを記述する経書および経書解釈の内容から言えば、おおむね四つのタイプに区分して理解できる。以下、まず経書および経書解釈の内容紹介を中心、小さなタイプから大きなタイプへ、拡大する四つの天下とその生成のありかたを瞥見することにしよう。

(一)『礼記』王制篇の天下——方三千里の九州＝中国——

『礼記』は、前漢後期の戴聖が編集した礼に関する文献集であり、収録された諸文献は、戦国期の著作から、漢代に入つて著述されたものまで、時代を異にする様ざまな内容をもつていて。その代表的な一篇である王制篇は、漢初の文帝が博士・諸生に命じて著述させたものであると言われる。その当否は別にして、まず王制篇で説かれる天下の内容を紹介することにしよう。

天下の領域構造——戦国秦漢期を中心に

渡辺信一郎

はじめに

中国の伝統社会において、古典的と称すべき国家観あるいは世界観があつたとすれば、それはどのようなものであり、またどのような時期に生まれてきたものであろうか。

は、専制国家の発展とともに、その内容を拡大し、変容してゆくのである。小論は、天下観念、とりわけその領域観念の展開を検証しながら、古典的と言うべき天下観念の成立過程とその特色について考えてみようとするものである。

さて、先に公表した「『天下』のイデオロギー構造——唐代中国を中心にして」（『日本史研究』第四四〇号、一九九九年、以下前稿と呼ぶ）のなかで、私は、唐代中国における天下認識について考察をおこなう、つぎのような結論を得た。

天下は、禹跡＝九州＝中国の画定された伝統的観念領域を中心として、戸籍・地図を基礎にその時どきに実現される州県－編戸百姓支配を主体とする実効的支配の領域である。実効的支配の領域であるが故に、唐代前半期の羈縻州支配に特徴的に見られるように、天下は、周辺の夷狄をも領域に包摂する場合があり、帝国的相貌を呈することがあつた。このような認識を基礎に、私は、九州＝中国の編戸百姓支配を中心的本質としつつも、その周囲に夷狄——異民族社会が存在することを条件とし、時には内属した夷狄に対する支配をも包摂する、このよ

天下という言葉は、すでに明らかにされているように、戦国時代に登場する。しかし言葉の登場は、ただちに古典的とよびうる内容をそなえた国家観の成立を意味しない。事実、戦国期に出現した天下観念